

# 戯曲『毒薬と老嬢』における殺人者たち

宮村 一 幸

ジョセフ・オットー・ケッセルリンク作  
黒田絵美子訳『毒薬と老嬢』全3幕4場

この戯曲は1996年1月 舞台芸術学科演劇コース3回生の実習として学内で上演され、出演者に妙に人気のある芝居となった。内的葛藤や深層心理の追及にわずらわされる事もなく、見たまま聞いたままに展開してゆくこの芝居は、学生たちにぴったりだったのだろう。アーサー役とアビー役の人は、テーブルのセッティングを2人で毎日くり返しているうちに、姉妹としてのリズムが生まれブルースター家の生活を満喫したと言う。悪の典型をホラー映画に探った人も、アルコール依存症の人間観察に深夜の街をさまよった人も、その他の役の面々も、人間の暗黒面をかいま見ながら、やって面白かった、難かしさと楽しさを学んだと言っている。

毒入りワインで連続殺人を犯し、しかも死体を自宅の地下室に埋めるという気味の悪い話を、楽しい人情味ある戯曲に仕立てるのに作者はどんな味付けをしたのか。ちなみにハリウッドの人情派監督として知られるフランク・キャプラもこの戯曲を映像化している。

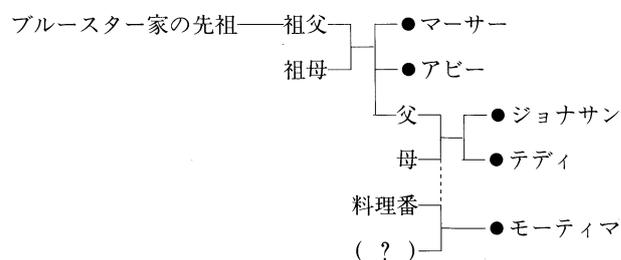
## あらすじ

1941年9月。ニューヨーク州ブルックリン。ブルースター家の老姉妹マーサとアビーの家の居間。アビーと甥のテディは客のハーパー牧師と午後のお茶の時間をすごしている。話題は友愛の精神。「戦争だの暴力だのは全く無関係」なこのあたりは平和そのものだ。プロフィ巡査

とクライン巡査が古いおもちゃを貰いに来た。マーサは病人にスープを届けてきた。老嬢たちはかわいそうな人達に何かしてあげずにはられない。

牧師と入れ違いにやってきた彼の娘エレーンは、もう1人の甥モーティマと意気投合している。ついに2人は婚約し、おば達は大喜び。その上モーティマは絶滅寸前の赤カンムリツバメを見つけ、心うきうきルンルン気分の真最中、窓際の長椅子の中に死体を見つけてしまう。うるたえる彼におば達は「知ってますよ、名前はホスキンスさん」すでに11人の死体が地下室にあるという。マーサとアビーは身寄のないお年寄を毒薬入りのぼけ酒でもてなし、頭のおかしいテディが黄熱病の犠牲者と思いきんで埋める、という手順が出来ていたのだった。動転したモーティマはエレーンにも上の空、2人の幸福な気分もぶちこわされる。そんな所へもう1人の甥ジョナサンが20年ぶりに帰ってきた……

## 家系図（●印は舞台に登場）



## ——耳——

舞台はなごやかに始まる。牧師との午後のお茶、おいしいジャム、おもちゃ、スープ、珍らしい小鳥、若い2人の婚約、窓からは教会とそれに続く墓地が見え、十字架に囲まれた聖なる家である。皮肉にも時代は世界をあ

げでの戦争のまっ最中、もちろんアメリカも加わっている。しかしここブルックリンは、そしてブルースター家は平和だ。

牧師も警官たちも老嬢を誉める言葉を惜しまない。

ハーパー牧師—「平和だ、この家の中にはまだ昔の美德が生き残っている」とキャンドルのあかりや礼儀作法を喜び「お宅のパンはつい食べすぎてしまう、このジャムがおいしいんでね」姉妹は料理上手である。「家内が患っていた何か月、それから死んだ時のブルースター姉妹の心づくしと言ったら。これがやさしさ、心の広さというものかと初めて知らされました／お2人の慈悲の深さには頭が下がります」

プロフィ巡査とクライン巡査——テディが使っていたおもちゃを寄附してもらいに来た「貧しい家の子供たちのクリスマスプレゼントにする／すばらしい考えだ、子供たちが大喜びだ」肺炎の奥さんのためにはスープ「いつもいつもいただいてばかり」。警官たちとこの一家はすっかり親しい間柄になっている。「こんな立派な家にとんだ不作」と言われるテディは自分をテオドラ・ルーズベルト大統領と思込んでいて、夜中であろうとおかまいなしに内閣招集のラッパを吹き鳴らす。近所から苦情が出るたびに巡査たちはブルースター家を訪れ、注意をし、ついでに姉妹の手厚いもてなしを受けていたのだ。テディの父、姉妹の弟に当る人は「ずいぶんな天才だったとか」。テディの祖父、姉妹の父に当る人は「億万長者になった／なかなかの海千山千だった／いづれにせよばあちゃん達がこうして暮していけるだけのものを残したって事だ、大したもんだ／それをあの人達は、人のために使っている／本当に人が良すぎるよね、誰にでも親切にしちゃうんだから」。クラインは行方不明者の部署にいた時、この家が下宿屋として不動産屋のリストにのっているのを知った「部屋を探しに来た人においしい食事を出し、なにがしかの金を握らせて帰してやるんだ／そんなにまでして他人に施しをしてるんだな」と大感激。

「慈善事業」の内容を知ったモーティマがエレーンに「おば達だっておかしなところがある」と注意しても「あれほどまともで、しかもやさしい人達には会った事がない」と取り合わない。人に親切すぎる、寛大すぎる、情

深すぎることはほほえましい変り方だと言う。法と秩序を守る権力の象徴たる警官たち、信仰と道徳の指導者たる聖職者、共に一目見て職業のわかる典型的な制服の人たちが、こぞって彼女たちの積極的な善行を誉めにほめる。ほめ言葉の大洪水を観客は耳にする。

## ——目——

当時、アメリカ社会ではワスプと呼ばれる人達が最高位のエリートだった。WASPとはホワイト・アングロサクソン・プロテスタントという3つの組み合わせを持っている人の事で、この国をつくり始めた頃の子孫である。しっかりとした生き方の理念をもち、論理に強く、感情に振りまわされず、流行に流されず自分たちのペースで静かに生きる。今も指導層に多い。

かって、イギリスの宗教改革で弾圧されたピューリタンの分離派（ピルグリム・ファーザーズ）は1620年、メイフラワー号に乗って新大陸アメリカに移住した。ブルースター家の先祖はこのメイフラワーでイギリスから渡ってきた誇り高いワスプである。マーサ達の父親の代で財産を築き、オーク材のどっしりと重々しいビクトリア朝風の屋敷を建てた。3階建、地下室あり、実験室あり、ベッドが10台入る病室あり、寝室は少なくとも5つ。ビクトリア風の精巧な装飾をもつ家具調度品、銀のティポットのお茶道具なども、イギリスであつらえて取り寄せたにちがいない。古き良き時代の名残を見せる。

ビクトリア女王の君臨したのは1837年から1901年と長い。この時代のイギリスは、技術と工業と民主々義がめざましく発達した一方で、堅苦しい風俗習慣や善悪の観念がおしつけられたという、矛盾をはらんだ変革の時代であった。宗教、道徳による抑圧が強く、世間体をつくらう事が大切にされた。性に対するタブーも多く、控え目で用心深く振舞うのを特色としていたので、女性の服装も身体の線が見えないようにとデザインされた。長袖、ハイネック、コルセット、針金入りペチコート、後に引きずるロングスカート、下半身のカーブを目立たなくするバツルなどの工夫がこらされていた。

芝居の時代設定1941年現在、60歳代後半とされているマーサとアビー姉妹は、このビクトリア朝のまっただ中

に生まれ、青春をすごしてきた事になる。「ビクトリア朝の魅力をもった感じのよい、小柄な太っちょばあちゃん」姉妹は、今や時代おくれになったドレスをたっぷり持っていて、今だにそれを着ている。「シルクの喪服／お母さんからもらったブローチ／イギリスみやげの指輪」マーサの「首を隠すように衿もとにレースのたくさんついたドレス」は、父親の実験中の爆発で火傷した傷跡を隠すためのものでもあった。この服装の設定は単純ではない。テディも衣裳持ちで、モーニングに鼻めがねだったり、署名用の服、熱帯用の服にと着がえ、マナーを心得ている。ブルースター家は見るからに裕福で由緒正しく礼儀正しい。過去の栄光や財産は反発を買う事も多いが、にもかかわらず心やさしく人につくすとなると一層の称賛があたえられるものだ。

### ——善女の善意——

マーサとアビーは世事にたけた常識人である。エレーンの恋人モーティマはニューヨークの新聞記者で演劇評論の係だから、デートはいつも芝居見物。父親は心配でしょうがない、厳格なピューリタンの老牧師にとって芝居などという快楽は罪悪にひとしい、まして夜中の3時に帰ってくるなんて。アビーは「大丈夫、あの子はお芝居を嫌ってます、いつもけなした記事ばかり書いてますよ」そんな仕事でも誰かがやらなければならないのだし、そんな時でも牧師の娘さんがそばに居てくれる事で救われると執りなしてやる。説得がうまい。先々の事も考え、年老いてゆく自分達が神様に召された後、残されたテディが強制的にどこかの施設に収容されてしまわないように、今のうちにハッピーデイル療養所の入所手続きをしておこうと計画している。

モーティマは演劇評論の係になる前は住宅情報の係だった。おば達は唯一まともで気さくな甥の書く記事を楽しみにして読んでいたにちがいない。そして知ったのだ、世の中には住いを捜している人が多い事を、身寄のない年寄もまた多い事を。持ち前の親切心から部屋を貸そうと思う。ある日、部屋を借りに来た孤独な老人が死んでしまった。「急に心臓マヒをおこして……座ったまんま、とても幸せそうな顔をして」。だけどそうそう自然に亡く

なる人ばかりが来るはずもない、だから自分達の手で幸せにしてあげられるもんなら——「ぜひそうしよう」。

「ぼけ酒2リットルに対して砒素茶さじ1杯、キニーネ茶さじ2分の1、かくし味に青酸カリ少々」砒素もキニーネも青酸も毒薬界の古典的代表選手だ。モーティマは感心して言う「そりゃ効くなあ」「効きますとも飲んでからしゃべったのは今までにたった1人。それも一言“おいしい！”って」彼女たちはおいしいお料理を作る要領でおいしい毒酒をつくる。この毒にはぼけ酒が合うのも実験ズミ「お茶だと鼻にツンとくるのよ」

「ぼけの木」は庭つづきの教会の墓地にたくさん生えている。毒薬の壺は実験室の棚にあった。彼女たちの父親は薬屋であり医者であり診療所を開いていた。「インチキという噂もあったが、検死の時、特に毒を飲んで死んだ場合などに役に立つ人物だった」という。家の中には常に死体の1つや2つは置かれていた。父の実験を手伝っていた姉妹には死体は慣れっこだ。幼児の頃の体験がその人の人生の土台を、あるいは方向をきめるうえで重要な力を持つとよく言われる。かつて身についたものはいつか姿を現わす。自宅で老人の死体を目の前にしてマーサとアビーは幼い頃、若かりし頃を思い出す。なつかしい死体、慣れ親しんだ毒薬、閉じ込められていたものが浮かび上ってきた。材料はある、知識はある、条件は揃っていた。いつも条件の揃うのが芝居だ。

「ぼけ酒」と訳されている自家製ワインは、原文ではエルダベリーワイン。<sup>エルダー</sup>Elderは和名ニワトコ（庭常・接骨木）。実は熟すと美しい紅色になる。ニワトコの木はヨーロッパではローマ時代以来、霊木として崇拝され、万病を治す薬とも言われた。西洋におけるニワトコの木には相反した2つの象徴的意味がある。生長が速く、夏の盛りに勢いが強いので不死の象徴とか、精霊が住むと言われた。アンデルセンの童話「ニワトコおばさん」では、この精霊が回春の寓意とされている。ところが反面キリスト教伝説では、キリストが磔刑にされた十字架、裏切り者ユダが首をつった木は、オーク、ヒイラギ、ポプラなどの説があり定かではないがニワトコ説もあり不吉とされた。中世には魔女が変身するとも言われている。不死、回春を象徴するエルダーの酒を上品な老婦人からや

さしく勧められたら、孤独な老人はこぼみきれまい、いただきますとえエルダーが不吉な魔女の木だろろうとも。

キリスト教では死は忌むべきものではなく復活への期待を秘めた旅立ちである。葬儀は死者の生前の罪をゆるし、安らかに神の国に旅立てるように祈る大切な儀礼だから、マーサとアビーはまず宗派を聞いておいて、その宗旨にのっとった式をとりおこなう。60 数年も教会の隣りに住み、何人もの聖職者とつき合ってきた彼女たちは、敬虔な信者であるばかりでなく、儀式の知識も身につけている。お葬式をするのにも各宗派にのっとってやってあげられる。

はじめに心臓発作をおこしたミッリジー氏はパプティスト教徒。アビーが 1 人でもてなしたホスキンス氏はメソジスト教会。惜しい事にモーティマが追い帰したギブス氏はプレスピテリアン（長老派）となっている。パプティストもメソジストもプレスピテリアンも、元は英国々教会を経由して成り立ち発展した有力なプロテスタントの諸派であり、特権層である。新しい教派が続々と生れ、多様に分裂してゆく中で、彼らは古典的なエリートと言えよう。ちなみに隣の教会は「聖公会」英国々教会直系でエписコパルチャーチ（監督教会）である。

彼女たちはいそいそと喪服で正装し、いくつもの宗派、それぞれの儀式を使いわけ、聖書を読み、讃美歌を歌い、日曜日には墓に花を供えてお祈りする。生まれて 60 数年間一緒に暮らし、目くばせひとつで気持が読みとれる姉妹にとって、連繫プレーはお手のものだった。テディは丁度、地下室に「パナマ運河」を掘っていたので、格好の埋葬場所を提供することになり、儀式に参加しているが実状は知らない。彼は黄熱病の犠牲者だと思っている。

姉妹 2 人で 1 人を殺していたのが、ホスキンス氏を 1 人で殺すのに成功、次は 1 度に 2 人殺して「ダブルのお葬式をしてみたい」と親切はエスカレートする。そんな彼女らが「今、新しいレパトリーに挑戦しているのよ」と台所にはいると、お料理とわかっていてもつい毒菓のレパトリーと勘ぐってしまう。気力は衰えを見せない。

骨折して動けないベニッキーさんのところへスープを届けてきたマーサが言う「足を 1 本切らなきゃいけない

って」アビーは目を輝かせて「そばにいてあげましょよ」何て心やさしい人達だと囲りの人は思う。2 人は手術につきそえないと言われてがっかり、彼女たちは手術を見るのが大好きだったのだ。

このレディ達に殺人の趣味があるのを観客は知りモーティマも知った。しかし牧師や警官は疑おうともしない。善意の殺人者は、自分たちの行為を異常とも犯罪とも思っていないから実に堂々としている。オロオロするモーティマに「なんですいい年をして」と叱り、殺人の打明け話のあとで「あゝのんびりしちゃった」なんてのびのびしている。この異常と常識のズレが観客を楽しくハラハラさせる。

### ——悪役登場——

20 年ぶりに帰ってきたジョナサンは、刑務所から脱走した精神異常の凶悪犯として指名手配中の身だった。相棒のアインシュタインの整形手術で、フランケンシュタインそっくりの顔になっている。

“ジョナサン”は初演の時、プロデューサーのハワード・リンゼイと友人のラッセル・クラウスの助言で作者が書き加えた役で「フランケンシュタインみたい」な顔は、原文では「ボリス・カーロフみたい」となっている。カーロフは個性的な顔の俳優で、ハリウッドのホラー映画『フランケンシュタイン』1931 年、『フランケンシュタインの花嫁』1935 年、で主人公に扮して有名になった。初演ではこのカーロフ本人がカーロフにうりふたつというジョナサン役を演じて話題になっている。

ジョナサンは「祖父のような外科医になりたくて、医学部も出ないで開業」し、それがばれてブルックリンを追われた。途中ロンドンで知りあったやはりニセ外科医のアインシュタインと組んで、世界殺人行脚を続けてきた。ロンドン 1 人、ヨハネスバーグ 2 人、シドニー 1 人、メルボルン 1 人、サンフランシスコ 2 人、フェニックス 1 人、シカゴ 3 人、ここへ帰る途中で 1 人スペナルゾさん、合計 12 人。他に、撃たれた後肺炎で死んだので数に入らないサウスベンド 1 人である。彼らはスペナルゾ氏の死体を持ちこんできて地下室に埋める魂胆だが、おば達は猛反対。自分たちのお客様 12 人で地下室は満員だと

明かす。マーサ・アビー組は人数の話になったとたんに負けん気を起して、初めの「心臓マヒ」もちゃっかりと殺しの数に入れてしまった。12対12、同点だ。「すぐ出しぬいてやるさ」と対抗意識をむき出しにするジョナサンのターゲットは、気に入らない弟のモーティマ。おば達のターゲットは？殺しは数を競うゲームになってきた。

ジョナサン組はついにスペナルズ氏を埋め、地下室の死体は13人になった。

同じ殺人という行為をするにしても、マーサ・アビー組とジョナサン・アインシュタイン組とは殺しの美学がはっきり違う。ジョナサンの殺しの美学は残酷さにある。様々な方法を駆使して時間をかけて苦しめる「芸術」で、その苦痛を見るのが楽しい。子供の時すでにモーティマをベッドにくくりつけ、足の爪の間を針でつついたり、イモ虫を歯で喰いちぎったりしていた。「兄さんはこれまで出合った生き物の中で最も残忍で極悪で軽蔑すべき存在だ」とモーティマは言う。これこそ、犠牲者の恐怖や苦痛の反応に恍惚とするという、連続殺人犯の典型、誰しもが納得する殺人鬼である。殺人を悪と認識して、ばれる事、捕まる事におびえるジョナサン組が、世界中をかけずりまわり、びくびくと逃げ廻りながらやってきた仕事を、老嬢組は「居ながらにして」やってのけていた。そして2組とも殺人が癖になってやめられなくなっている。殺しのデュエット対デュエットの競演。

こんな場面に登場させて申しわけないけれど、双子の長寿婦人“きんきん、ぎんさん”は、TVに出演するなどして人気者になり、どんどん元気に表情豊かになってこられた。他人との接触、適度な緊張は生きるはりあいになる。老いてますます<sup>きかん</sup>壮であるためには役割を持つ事が一番だ。

## ——芝居のイロハ——

戯曲を読んだだけではピンとこない場面も、舞台上で見るとハッキリする。この芝居も目で見て楽しい。ト書でも、モーティマは「見るからに劇評家」であり、ウィザースプーン氏は「見るからに厳しそうな説教師」。ジョナサンは「性格が恐ろしいだけじゃなくて顔までも」恐ろしい悪党。警官、牧師はもちろん見ただけでわかる。と

にかくこの芝居は見るからにの連続である。

舞台はブルースター一家の居間だけで終始するが、閉ざされた室内と外の関係が一目瞭然に配置されている。上へは2階にあがる階段、そしてバルコニー、さらに3階に続くことを示すアーチ。下へは地下室にはいるドア。1階のフロアでは台所へ続くドア、ポーチと前庭が見える下手玄関のドア、教会と墓地とが庭つづきなのがわかる上手の大きな窓、ここには厚地のカーテンが掛けられロープで開けしめできる仕掛。また庭をぐるっと廻って窓から出入りも可。芝居つくりの定石に従って、その場に不必要な人物は、台所へ隠れてしまうことも出来るし、2階へ行く、地下室へ（これは意味が大きい）用事を作って舞台面から消してしまう。玄関はもちろん外の世界との連絡口。上手の窓の活躍も多い。例えば、埋葬前のホスキンス氏は、ひとまず窓際の長椅子の中にいらっしやる。窓には厚いカーテンが引かれ閉ざされた部屋、マーサはメソジストにしてはハンサムという死人に対面しようと、スキップしながら窓際へ、と、カーテンを押しあげて窓の外からヌーッとフランケンシュタイン、いやジョナサンの顔が出る「ギャー!!」死人は恐くない姉妹だがホラー映画は怖い。観客にもどんなにハンサムかと期待させておいて、突然に怪人の顔だ。ヒヤーとさせられて、やられたわいと観客はニヤリ。

殺人劇なんだから、おどろおどろしい場面もちゃんと用意されている。電気を消した暗闇ではローソクやマッチがうまく使われる。ジョナサンはモーティマを芸術的に殺そうと、テーブルに外科手術用の道具を並べる。その両端にローソクがある。ローソクのあかりは立っている彼の顔を下から照らす。ゆれ動く炎が壁の肖像画を照らす、浮かび上ってくる先祖のエキセントリックな姿、それに重なり合うように殺人鬼ジョナサンの影。狂気の血がにじみ出るシーンだ。

マッチのあかりは指先1本で消せるので、見せたいものを必要な時間見せ、あとの暗闇で歌舞伎のだんまりのような場面をつくる。小さなマッチのあかりが、あちら、こちらと点っては消える。死体の入替シーンにもってこいの照明方法である。

居間には電話がある。電話は舞台に居ない人と対話で



イラスト・田中照三先生（舞台芸術学科美術コース元教授） 1954年かもめ座公演パンフレットより

きる便利な小道具で、煩雑になる相手のセリフを聞かせることもない。モーティマは電話で新聞社にしゃべり、自分が出かけねばならない一部始終を観客に伝える。一方、おば達が部屋を借りに来たギブス氏にぼけ酒をすすめているのを目で追ってゆく。2人の「趣味」を目にするのは観客もモーティマも初めてだ、彼が目で追うものを観客も追いかけて、耳を彼女らのセリフに傾ける。舞台の人物の見るものを観客は注目するという舞台の鉄則である。

モーティマは死体を発見した直後だから、あわてふためいていてじっとしてられるはずがない。しゃべりながら動く、階段を登り降りもするだろう。だが電話のコードの長さの範囲でだ。その制約の動きの中で右に左にチラチラとおば達を見ている。そしてハタと気がつく。ギブス氏が危ない！ 彼はわめき散らしてギブス氏を追い帰してしまう。観客はほっとしながら、ちょっと残念とニヤリ。

## ——大統領からスーパーマンへ——

観客の気持をリラックスさせ、軽い笑いと共感を呼ぶために、皆がよく知っている事柄、人物などを盛り込むのも定石のひとつだ。この芝居にも、人名、地名、宗教、習慣、流行など当時のアメリカの風俗、常識的日常生活、そして皮肉もたっぷり盛り込まれている。例えば、自由の国アメリカでは大物をサカナにするのが好きらしいが、ここでは大統領が何人も登場する。テディ・ブルースターが自分はそうだと思うこんでいるテオドラ（テディ）・ルーズベルトは第26代アメリカ大統領、「パナマ運河」は大統領在任時に建設中、1906年にノーベル賞を受賞、「アリス」も実在の娘で父ルーズベルトの良き理解者だった。1941年当時は、やはりルーズベルトだが第32代のフランクリン・ルーズベルトの時代、彼は4選をはたした人気者だった。テディのあつかい方を心得ているジョナサンが彼に名のるウッドロー・ウィルソンは第28代目の大統領という豪華さ。また、ジョナサンの連れてきた飲んだくれのアインシュタインに「ノーベル賞のアルバート・アインシュタインではありませんよ」とわざわざ言わせる念の入れようだ。

家系だの血筋などをあまり問題にしないアメリカ社会だが、反面、家系をさかのぼってルーツを辿るのは好きだという。写真や肖像画による家族の歴史を廊下の壁一杯に飾るのも珍らしくない。

ブルースター家の居間には「先祖の一風変わった肖像画が掛っている」。モーティマはエレーンに「うちの家系には精神異常の血が流れている」と言って、2階と台所を見る、2階にはテディが、台所にはマーサとアビーが居るのだ。メイフラワー号に乗って渡ってきた初代は「インディアンの頭の皮をはいだ」し「あのおじいさんはね、死人を実験台にして薬をつくった」と、サイドボードの上の祖父の写真をわざわざ指差す。エレーンは納得しない、現にやさしいおばさん達の悪口なんか聞きたくない。しかし観客の目は写真にゆき、一風変わった先祖の肖像画にゆき、狂気の影がある事を納得する。今に始まったことではなかったんだ。

アメリカ人として伝統的な由緒正しい家柄を誇るブルースター家も、ついにこの代で血筋は絶えることになる。

テディにもジョナサンにも子供の気配はなく、マーサとアビーはオールドミスのまま。けれど次の世代を育てた、血のつながらないモーティマである。全くの他人の子を平気で養子にする事の多いアメリカ人は、血のつながりでなく、1人の子供を1人の人間として成長させること自体に喜びや意義を見出ししている。

終幕に突然語られるモーティマの出生の秘密、彼の母は料理番としてブルースター家に来た人だった。その時すでに身重で3ヶ月後にモーティマが生まれ、その後「父」と一緒になったのだった。精神異常の血を引いていると思い、エレーンとの結婚を諦めかけていたモーティマは、自分が私生児と知って大喜び。彼は人気者のスーパーマンと同じ新聞記者である。いかにも若者らしく、調子のいい、ちゃらんぼらんなどころのある現代っ子だが、婚約者は由緒あるエビスコパルチャーチの牧師を父にもつ娘だ。狂気のエスカレートしたブルースター家から、バランスのとれた新しいブルースター家へと世代交替がおこなわれたのだ。

## ——救世主——

さて、この芝居のジョーカーは狂気の人テディだろう。彼はついに家の外へ出ないが、家の中では居間、台所、2階の自分の寝室、そして「パナマ運河」の地下室へと上下に移動する。階段を登る時は必ず「突撃！」と叫ぶが誰もそれに注意を払わないので、いつもの事なのだとすぐわかる。見るからに異常の人だ。外に出ないテディと外部とのつながりはバルコニーへ出て吹くラッパにある。音楽の教師でもあった作者がラッパを舞台にとどろかすのは、ひとつは外部の人間である巡査を家に登場させたい時、もうひとつは家に居てほしくない外部の人間（ジョナサン、アインシュタイン）に自分が内部の人間でない事を思い知らす時だ。彼らはラッパの音で2度も、腸がひっくり返るようなショックを受ける。テディにはテディの理由があって吹くのだが、それが丁度うまい工合に、おば達が嫌がっているのにジョナサンが居座わろうとする時であり、モーティマが殺されかける時である。テディにはやっつける意識はなくても、やさしいおばちゃんや物わかりのいい弟をいじめる者をいじめる結果に

なり、観客は拍手喝采とはいかないまでもニコリする。

殺人鬼の相棒でありながら気の弱いインチキ医者アインシュタインは、ジョナサンがモーティマを殺そうとしているのを知っている。自分もジョナサンは怖い、彼が地下室へ行っている間にモーティマを逃がそうと必死になる「普通じゃない、何しでかすかわからない」だのにモーティマときたら、今夜見てきた芝居の主人公を「自分の身が危ないとはこれっぽっちも思わないバカインテリ」と話に夢中。ジョナサンが戻ってきた、手術用器具の入ったケースを持って。いよいよやる気だ。芝居の主人公を自ら演じていたモーティマは、芝居の通りジョナサンに縛られてしまう。あーあ言わんこっちゃない。殺人の楽しみにうずうずするジョナサン。景気づけに2人が飲もうとするのはぼけ酒だ。モーティマがじっと見ている、自分が殺されるのが先か、彼らが飲むのが先か。突然テディのラッパが鳴り響く、グラスを落して2人は命びろい。ラッパに逆上してテディを殺そうとするジョナサンを、懸命に止めるアインシュタインはどうもそれ程の悪人でもないようだ。

ラッパを聞きつけ苦情を言いにくるオハラ巡查、プロフィ巡查、クライン巡查、ルーニー巡查部長まで現われて警官の勢揃い。ジョナサンを見て、手配中の殺人鬼と見やぶったルーニー部長は、気付かなかった部下たちを叱りとばして大得意だ。相棒の人相書を電話で問いあわせている、目の前のアインシュタインを見ながら。舞台の人間の見るものを観客は見る「ニセ医者……身長は……目は青…」ハラハラしながら成行きを待っているアインシュタインと観客。ルーニーはついに気付かない。それどころかご丁寧に握手をして礼を言う。ニセ医者は、テディと共に療養所へ行きたいと言うおば達の手紙に、医者としてサインしてくれていたのだ。情けは人の為ならず。モーティマとテディを助けたアインシュタインは、観客の望みどおり虎口を脱する。

ジョナサンは逮捕された腹いせに「地下室の13の死体は全部おば達の仕業」とわめいたが、警官たちは誰ひとり信じようとしない。「12人は正真正銘うちのお客様／日曜日には花を…」と、マーサとアビーが説明すればするほどルーニー部長はうんざりして取りあわない。

「同点のまま12対12」とジョナサンはすてゼリフを残して警官につれ去られる。

「どうも根性の悪い子でしたよ／あの子を出し抜いてやりたいわ」ふと見るとテディをむかえに来た療養所長のウィザスプーン氏が寂しげに外を眺めている「ねえマーサ」とアビーは目くぼせ、マーサは心得たとサイドボードへ、左の棚のびんはすでに空、右の棚から新しいびんを取り出しグラスと一緒にテーブルへ。アビーがやさしい声で「ウィザスプーンさん」宗派を聞くまもあらばこそ「せめてぼけ酒でも……自家製ですよ……」

—幕—

早くお飲みよ そのぼけ酒を  
客のたのしみ幕が切る